

時を跨ぐ私は猫又

クラサナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私は、時を跨ぐ事が出来る妖怪・・・

猫又の先祖返り

ある時、気まぐれで時を跨ぎ

気まぐれで、ある学校の先生となつた

そこにいたのは、私と同じ先祖返りの白鬼院凜々蝶
その子はあまり喋らないせいか、虐めにあつていた

他の教員は、イジメらてるのを見て嬉嬉として凜々蝶を助けに行く・・・・馬鹿馬鹿しいと思った

家がお金持ちだから、助けに行くの？他の子だつたら助けないの？人間に何度目かの失望をした

「凜々蝶、貴女は私が守つてみせる、だから大丈夫よ？心配しないで」

校長に直談判しに行つたら、白鬼院はこの学校に沢山寄付をしてくれているとかなんとかで、対応して貰えなかつた
しかもたつたそれだけの事をしただけなのに
私は教員の座を奪われた

「ごめんなさいね、凜々蝶」

時を超えて、会いに行きます

目

次

始まりの時間

先生

巡り会い

20 8 1

始まりの時間

「時間は重みなんですよ」

ある人が僕に言つた一言

・

先生、僕もそう思います

貴方に出会えたおかげで、僕は変わることが出来ました
惨めな僕を、貴女は笑顔で抱きしめてくれた

「君は惨めなんかじやないよ、凜々蝶・・・大丈夫、私もあなたと同じだもの」

そして他の教員に反発もしてくれました、反発のせいで教員を辞めたのも知つていま
す、貴方が教卓から消えた時、貴方がもういなくなることに酷く絶望しました

そして先生、ごめんなさい・・・・「先生が常に言つていた人を大切にする事」僕は
守れていません

僕には悪癖があります

「妖館つてしつてる？あそこに新しい入居者ですって」
「シークレットサービス付きのセレブマンション？」

「え、あそこつて変人ばかりの屋形じゃないの？」

「うそ、お化け屋敷つて聞いたけど？」

先生がいなくなつてからのもので、自分では制御出来ない

「いや、注目の的ですねー」

「暇なる主婦に注目されて嬉しいか？井戸端会議の議題になるのはごめんだ、さつさと

仕事をしてもらおうか。』

無駄に虚勢をはつて悪態をついてしまう

これが僕の悪癖です

先生、貴女はこんな私を許してくれますか？

「おー、りりちよ。来てたのか」

「なんだ反ノ塚か、ふん久しぶりだな」（・・ω・・）キリツ

「あれ？今落ち込んでなかつた？」

ここは通称『妖館』正式名称は、メゾン・ド・章程

一世帯につき一人のシーケレットサービスが付く最強のセキュリティを誇る最高級
マンション

ここは厳しい審査をクリアした、選ばれた人間しか入れない、その内容は高額な家賃
を払う能力・家柄・経歴

と、いうのがおもて向きの条件

別に僕自身はこのマンションに特別こだわってはいないしシークレットサービスも
断つた

「俺、シークレットサービスって最初工口いサービスかと思つたんだよねー」「はつ、広辞苑にものつてるぞ?」

何であれ先生、僕は一人になる為に家を出ました
そして今日からここに住みます

「(4号室、ここか……)」

ドサツ

「ん……んつ、ぐつ……」

凜々蝶は運んできた荷物を落としてしまい、それを持ち上げようと荷物に手をかけた

そこには笑顔を見せるイケメンがいた

「……フン、ありがとうと言うべきか？」

「いいえ、そのようなお言葉は不要でござります

お会い出来る日を心待ちにしておりました

凜々蝶様・・・・

イケメンは恭しく頭を下げて、次に顔を上げた時、イケメンの目からは涙が溢れてい
た

「?」

「本日から凜々蝶様の生活の安全をサポートさせて頂きます、御狐神双熾と申します」

大変変人なシークレットサービスを持つことになつた凜々蝶、まるでその姿は忠犬能

力ようだつた

つぎの日、そんな御狐神に出待ちされ、館内を案内してもらうことになった

「私・・・體々宮カルタ・・・シークレットサービス・・・2号室の・・・人を守つて
ます」

おつとりした、可愛らしい女の子に

「メツ・・・・メニアーック!! 黒髪パツツン色白ツリ目ちびっこで細いのにプニプニ黒
タイツ着用・・・あなたヤバいわよ!?」

女大好きな自分だつて綺麗であろう女性

主婦の噂話は悔れないと再度悟つた凜々蝶、館内を回つたところで、御狐神が鎮静効
果のあるラベンダーで紅茶を入れてくれる

その時凜々蝶は自分の事を話し出す

「僕自身には何もないのに・・・僕に付いている家柄、そっちが本体のようなものだ」

白鬼院家

古くから支え続いている名家の世話係がいて、沢山のお手伝いさんがいる
それが僕ので、そして学校ではさんざんいじめられていたそれを話したら、彼は涙を
流してくれた

「そんなお気持ちでずっとといらしたのですか凜々蝶様・・・そんな事をずっとお一人で抱
えて・・・」

「な、な泣くな!! 大きいんだからっ!!」

「凜々蝶様・・・」

「よく泣くな君は・・・」

その日の夜、館内に侵入者が入り込んだが、雪小路野ばらさんと御狐神双熾があつさ
り退治

この学校妖館では、ただの侵入者なんて怖くないのだ
何たつてことは、入居者全員何かしらの先祖返りなのだから

先生

「凜々蝶様・・・本当にいつてしまわれるのですか、僕を捨てて・・・」

「すぐ戻る」

「すぐとは・・・？離れている間の一瞬が千秋のように感じてしまうのに・・・」

「君」

「凜々蝶様・・・つここでずっとお帰りをお待ちしております・・・!!」

「トイレぐらいは普通に行かせんか!!」

「ここはとあるデパート、何故こんな所にいるかというと、3時間前に遡る

反ノ塚と朝ごはんを食べている凜々蝶、甲斐甲斐しく反ノ塚のこぼしたカレーランドの汁を拭いてあげたりしている

ここは妖館、先祖に妖怪の血が混じる一族の先祖返り達が集うマンション

凜々蝶達先祖返りは純粋な妖怪に疎まれ狙われている、だからこのマンションがつくられたのだ

「おまえ仲良くしてんじやん、最初はすぐ解雇すんのかと思つたけど
「・・・・・」

御狐神は凜々蝶のシーケレットサービスを務めている人で、凜々蝶の素直じゃない心を温めてくれる人である

『僕は変わらなくてはいけない、自信を得て真っ当に人と関われる自分になるまでは：：それまでは1人でいないと・・・・・あの時のように、先生を・・・・それに人を傷つけるだけだ・・・・』

『（先生・・・・？）僕は凜々蝶様といて不快な事など全ありませんよ』

『そ、そんなことあるか！それに僕は冗談も言えないし話の種になるような趣味もないし・・・・君だつてすぐ飽きる・・・』

『では

試してみましょう』

というように、凜々蝶を癒してくれたのだ

ああ、そうだ

この話によく登場する先生というのは、凜々蝶がイジメらてるのを見て助けてくれ、

そして家の見返りなんて求めない凜々蝶が大好きで憧れていた先生である

「ふん、べつにまあいつまで持つかは知らんがな」

「お、なになに気に入つちやつた？良かつたじやん、仲良なさいよやつと出来たお友達、ママ嬉しいわりりちよちやん、凜々蝶が大好きだつたあの先生は友達ではなかつたもんな」

「ち・・・・・違う！」

「困つた時はアレだおまえの「必殺☆言いにくい事は文に認める」みょくょくょくょくにスナオなんだよな文面だと。あれキュンときたよ？」

「忘れる！言つただろう、あれは字の練習だと・・・・先生のは違うが」

「へいへい」

「それと、これ、カレー染みに」

「おー（律儀なんだよななあ）」

と、そんなこんなで、御狐神と朝の挨拶

朝ごはんをと勧めた御狐神にもう食べたと伝えた時の反応がとても面白かった。
それからそこに反ノ塚が合流し、3人でお出かけに行くことになつた・・・・。

そんな経緯で現在に戻る。

「お二人は仲がよろしいのですね」

凜々蝶と反ノ塚の会話を聞いて、急にそんな事を言い出した御狐神

「は？君の目は節穴か？」

「まーな、付き合いも長いし、まー俺は凜々蝶にとつてお兄さんみたいなもんかな」

「ただの近所のな」

「こいつ周りに敵つくりまくりじやん、ついつい頼れるお兄サンやつちやうみたいな?」

「近所の　　ただの

な」

「先生が学校やめてからは更にな、お兄様つて呼んでいいぜ」

「凜々蝶様のお兄さまのような方でしたら是非そのように・・・」

「呼ばんでいい」

「いいじやんりりちよ、先生だつて俺のこと兄貴みたいだつて言つてたし」

「せ、先生がか？」

未だに頭に乗せられている手をどかそうとした凜々蝶は、先生という言葉に異様に反

応を見せていた、そんな凜々蝶の様子が気になつたのか、御狐神は先生と呼ばれる人に
ついて聞いてみることにした

「以前から気になつていたのですが、先生……とは、いつたいどなたの事なのでですか
？」

あそこまでして、人を拒絶していた凜々蝶が唯一名前を出し、なおかつ優しい笑みを
していたのだ、それは気になるだろう

「なに、りりちよお前言つてないの？あんなに大好きなのに？」

「……言う必要はないと判断した、だが御狐神君がそこまで気になるというなら、教え
てやらんこともない……」

「またまたあー聞いてほしくせに、先生の事」

そんな言い争いをしながら、3人は近くのベンチに腰掛ける、勿論御狐神も隣に座ら
せた

「それで？御狐神さんは何を聞きたいの？」

「はい……凜々蝶様が、何かある度にその名を口にしていたので……先生とは、
いつたい」

「先生は……僕がまだ小学生だつた頃の副担任だつた人だ、誰にでも隔てなく接し
てくれる先生が、僕は大好きだつたんだ……」

凜々蝶は尊敬するような、寂しそうな顔で、先生の事を語つていた

「俺もりりちよとよくつるんでたから、その先生の事はだいたい知つてるんだけど……
なんつうか、変わつた人だつたかな」

「僕もそう思う、先生は僕達の家柄なんか関係無しに僕達を助けてくれた」

「いつつもりりちよの隣にいてさ……周りの皆が嫉妬するぐらいりりちよはベツ
タリ」

反ノ塚があの頃を思い出しながら苦笑いをする、いつもはここで反発する筈の凜々蝶
もその時は何故か大人しかつた

「お優しい方だつたのですね、その先生というお方は……その人の名前を聞いてもよ
ろしいでしょうか」

みつる)

「そうだな、その先生の名は……又星 満（またほし
と言うんだ、男のような名前だが、満先生は綺麗な女性だつたんだ」

満の話をする時、凜々蝶は満面の笑みで語つていた
お綺麗な方なんですね、と御狐神が返せば
多少興奮した様に、満の事を語つて見せた

「そろそろ暗くなつてきたなー」

「・・・・すまない、僕の話に付き合わせてしまつたな」

「大丈夫ですよ凜々蝶様、凜々蝶様のお話はとても楽しいものでした」

「そうか・・・・」

満の事を話していると、あたりはいつの間にかオレンジ色になつていて、凜々蝶は申し訳なさそうに俯いたが、御狐神が楽しかつたと言えば、その顔は明るく照らされた

「では、帰りましようか」

「そうだな」

その後、無事に妖館に到着したもの
體々宮が帰つてきていないと知り、3人でまた外に出る、初めて買った携帯の使い道
が人探しに使われるなんて思つても見なかつただろう

體々宮を探そうと反ノ塚が一反木綿に姿を変え、風に飛ばされながら探すという、本
気で飛ばされていることに気付いた凜々蝶が、反ノ塚を追おうとした瞬間
足元から、黒い壁のようなものが出てきた

「凜々蝶さま！」

御狐神が叫ぶもそれは遅く、凜々蝶は黒い壁に飲み込まれた
その瞬間、凜々蝶は見たのだ

自らを身分を捨ててでも守ってくれた、先生の背中を

『見つけた』

「なんだここは・・・!? それにさつきのは・・・いや、気のせいだろうな」

先生によく似た背中に動搖を見せた凜々蝶だつたが、すぐに考えを改めて数歩後ろへ下がる、とんと背中に当たるもののが壁だということに気付いた凜々蝶は、何の妖怪か検討がついた

「凜々蝶さま! 凜々蝶さまご無事ですか! ?」

「おいおいどうしたよコレ」

こちらは、凜々蝶がいなくなつて慌てている御狐神と相変わらずのんびりな反ノ塚凜々蝶を閉じ込められて怒った御狐神は変化して刀をその手に握つた

「おーい、りりちよー」

「反ノ塚！」

「無事か？」

「ふん、愚問だ

「これはただの『塗り壁』だ、夜道に現れ道を塞ぐというそれだけの妖怪だ」

凜々蝶の様子を見てくるように言われた反ノ塚は、凜々蝶に説明されて、安心したのかその場で横になり始めた

「順応力高すぎだろう」

突つ込む凜々蝶に反ノ塚は半分冗談だと返して、凜々蝶と再び話し出す、凜々蝶は御狐神が買い物に付き添つてもらつただけで嬉しそうにしていたのを思い出しす

「ふん・・・こんなもの・・・破つて通ればいい」

化け狐と鬼に変化したふたりは、同時に走り出し塗り壁を切り捨てた
その後何処からともなく鳴り出す携帯を取り出して、體々宮が帰ってきたとの連絡を
受ける

「おかえりなさい＆妖館へようこそ♡」

帰るとクラッカーを鳴らされ歓迎会だと聞く、凜々蝶はまた人を不快にさせると思つて遠慮しようとしたが、それが御狐神の為でもあると聞いて、歓迎会を一緒にすることにした、その日の夜に凜々蝶は買つた携帯で初めてのメールを送る事に成功したのだつた
「（メールつて手紙と違つて読み返せるから恥ずかしい・・・・！）」

そんな凜々蝶の2日間を御狐神に見つかることなく見守つていた人物があつた

『よかつた、心配していたのだけれど・・・・大丈夫みたいね』

黄金色の猫目を光らせ、ベランダの手摺に優雅に座る黒猫が、赤面している凜々蝶を

優しく見つめている

「先生にも、会いたいな」

顔を赤くしながらも先生を思つている凜々蝶に黒猫は更に目元を緩ませた

『もうすぐ会えるわ

待つていて、凜々蝶』

かすかなその声が、凜々蝶の耳に届き

顔を上げると、とても美しい満月が顔を覗かせていた

巡り会い

「いただきます」

凜々蝶は今日も昨日のように御狐神を置いて朝御飯を食べていた、昨日の反省はしていないのだろうか？きっとまた面倒な事になるのに

「凜々蝶ちゃん、今日も朝からメニアツク♡」

そんな凜々蝶を遠目で見ながら鼻血を流し続ける雪小路は、昨日聞かせてもらった先生の話をふと思い出していた

「（凜々蝶ちゃんの先生か・・・きつととってもメニアツクなんでしょうね、うふふふ）」

雪小路の反対側にすわっている反ノ塚でさえ、その時の表情はやばいものだつたらし

い・・・

「凜々蝶様！」

そこに登場した御狐神、ドアを開けると真っ先に凜々蝶の元へと駆け出した

「置いていかれるなんて、酷いです凜々蝶様」

スープを飲んでいた凜々蝶の手をつかみ、涙を目にためる御狐神に凜々蝶はタジタジになってしまっていた

「止めないか！」

凜々蝶の言葉を聞いてスッと立ち上がった御狐神は、何も無かつたかのようにいつも笑顔を浮かべた

何故急に笑顔になつたのか不思議に思つたが、泣かれるよりはマシかと自己解決した
凜々蝶だつた

「凜々蝶様、今日は新しい入居者が来るようですよ」

「なんですって!?それは聞きづてならないわね!どつちなの!?男?それとも女の子!?」

凜々蝶が口を開き掛けた時、雪小路が物凄い勢いで御狐神に質問を飛ばした
御狐神は動じることなく、雪小路の方を向いて答えた

「女性のようでしたよ、先程フロントでコンシェルジュの方からお聞きしました」

そう言うと雪小路は思いつきりガツツポーズを決めた

御狐神はまた凜々蝶の方へ向き直り、フワリと笑を零す

「楽しみですね?凜々蝶様」

そう問い合わせられた凜々蝶は、仲良く出来るかとても心配していた
また悪態をついてしまうかも・・・・と頭の中でグルグルと考え込んでいた

「それで？その人はいつ来るつて言つてたの」

反ノ塚の言葉に大きく頷く雪小路に御狐神はニコニコと答えた

「朝のうちにこちらに到着なさるそうですよ」

「へえー」

自分で聞いておいて反ノ塚の反応は薄い、反ノ塚の真横で朝御飯を大盛りで食べていた體々宮もあまり反応していなかった

「・・・楽しみ・・・」

あ、いや結構楽しみにしているようだつた

そして未だにグルグルと悩んでいた凜々蝶の耳にコツリコツリと床をヒールで歩く音が入ってきた

「来たようですね」

御狐神の言葉に、ご飯に夢中になつていた體々宮もボーッとしていた反ノ塚も鼻血を流していた雪小路も、心配で仕方ない凜々蝶もどんな人が入つてくるのか、ドアに注目した

ガチャリとドアノブの音が、静まりかえる部屋の中に響いた、そして音もなく開け放たれたドアを見て今まで座つていた凜々蝶はバツ！と立ち上がる、その拍子に椅子がかなりの音をたてて後ろに倒れた

凜々蝶はその椅子に見向きもしない、不信に思う御狐神と雪小路が凜々蝶を見ると、凜々蝶の顔には驚きが滲み出していた

「先生・・・・！」

その言葉に御狐神は大いに反応した、この間話に出てきた先生が目の前にいるのだから、反応するなと言う方が間違っている

『ふふつ、すぐに会えてしましましたね・・・久しぶり凜々蝶、反ノ塚君も久しぶりね』

漆黒を思わせるような少しだけくせつ毛のある髪を、肩口まで伸ばし、茶色い猫目は優しく穏やかに凜々蝶を見ていた

ふわりと耳に聞こえのいいアルトが、静かなラウンジにスッと消えていった

「おー、満先生じゃん久しぶりー」

マイペースな反ノ塚に対して凜々蝶はパニック寸前だった、なんせ今まで憧れて謝らなければいけないと思っていた相手が目の前にいるのだから、だがそれらの事を聞く前

に凜々蝶にはもつと聞きたいことがあるらしかった

「先生……何で貴方は昔と何も変わつていないのでですか……？」

凜々蝶の言葉に反ノ塚以外、誰もが首を傾げた
凜々蝶は今年で16歳、小学校の時の先生ならばこれくらいでも別におかしい事ではない

ちなみに、満の見た目は27歳程に見えている

「俺からも質問、せんせーはこの妖館に住むのか？」

反ノ塚の言葉に誰もがハツとした、確かにそうだ……

今まで凜々蝶は先生の事をただの人間だというふうに話していたのに、何故彼女はここに居るのか……考えるまでもない、それは彼女が先祖返りだから

「先生・・・・・貴女は・・・・・」

『言わなくてごめんなさい、私が先祖返りだということはあまり知られたくなかつたの、だつて私は永遠に時を超える続ける猫又だから・・・・・』

満はそう言いながらゆつくりと凜々蝶に近づき、凜々蝶の目の前まで来ると
ソツと凜々蝶の髪を撫でた、その行動が余りにも小学生の頃と記憶が似ているので、
凜々蝶は泣きそうになつてしまつた

凜々蝶が泣くのを我慢している時に満がよくやつていた頭を撫でるこの仕草

「先生・・・・・会いたかつたです、ずっとずっと会いたかつたです」

満の胸に顔を押し付けながら言う凜々蝶に満は笑つて言つた

『私も会いたかつたですよ、凜々蝶

貴女に会うために私は時を超えたのだから』

* * * * *

それから落ち着いた凜々蝶を椅子に座らせた満は、ラウンジにいる人全員に聞こえる
ように声を出した

『初めまして、私は又星 満と言います

先程も言つたように、猫又の先祖返りです……凜々蝶や反ノ塚君とは、小学校で先生と生徒として出会いました、何かと至らないところもあるでしょうが、これからよろしくお願ひしますね』

ふわりと柔らかい笑を浮かべた満に雪小路がフラフラと近寄つてその方をそつと掴んだ

「ミニア——————ツク!!!!」

『え?』

「漆黒を思わせるような黒髪なのにフワフワサラサラ瞳は優しい色合いなのにその目は丸みを帯びた猫目……貴女、やばいわよ!」

「うおっ、誰に対しても容赦ねーな……おーいりりちよーお前の先生が大変だぞー」

余りにも急に始まつた雪小路のミニアツク騒動、誰も止めることなく満は雪小路の餌

食となつていた

満は雪小路に両手首を握られながらも困つたように微笑んでいた

「……ハツ、み、御狐神君！ 雪小路さんを止めてくれ！」

「お任せ下さい」

放心状態から蘇つた凜々蝶は、御狐神に雪小路を止めるように頼んだ、いつそういう命令が来てもいいように隙無く立っていた御狐神は遅れをとることなく未だに満に何か言つている雪小路の肩に手をかけた